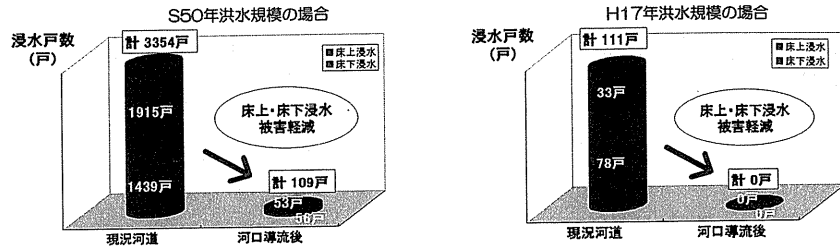


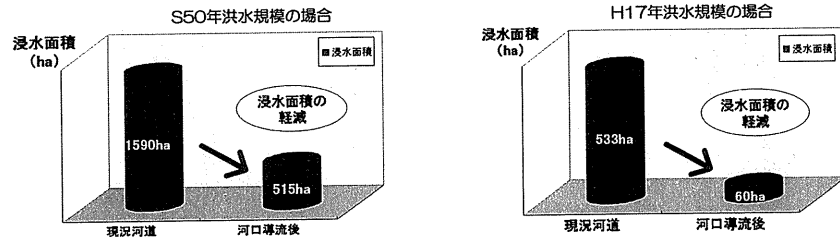
波介川河口導流事業の効果

波介川の河口導流事業は、現在の波介川合流点を仁淀川の河口部に付け替え、仁淀川からの逆流の影響を軽減、波介川の洪水を安全に仁淀川河口まで流下させるものです。これにより、過去の実績洪水に対する波介川流域の浸水被害は概ね解消されます。

浸水家屋数でみる効果

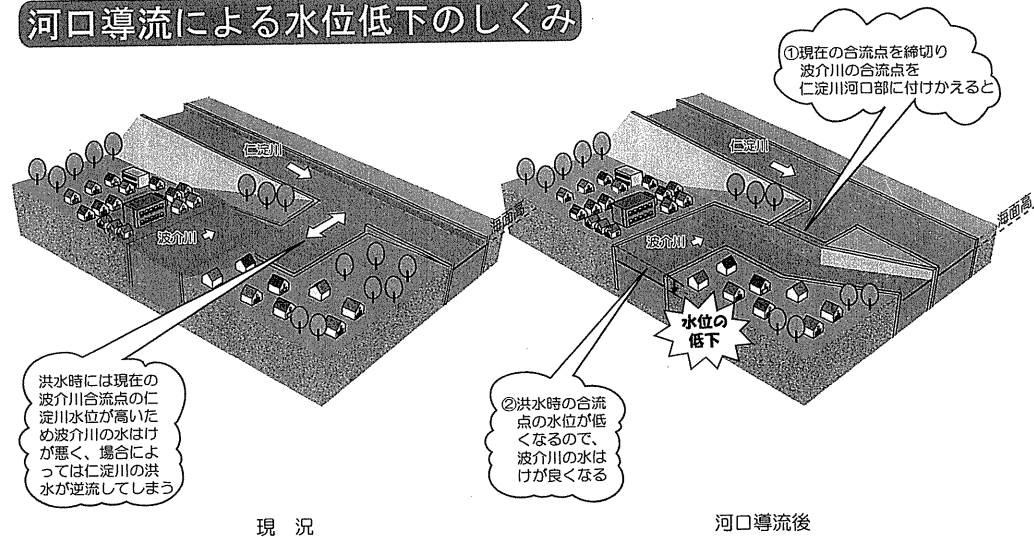


浸水面積でみる効果



※河口導流後の数値は過去の実績降雨に基づく再現計算結果によるものです。

河口導流による水位低下のしくみ



はげ 波介川河口導流事業

波介川床上浸水対策特別緊急事業



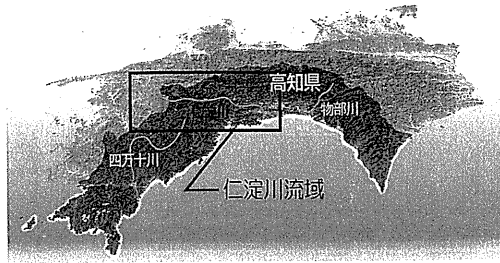
仁淀川河口上空より望む

安全で安心
生き生きと暮らせる
地域づくりのために



波介川河口導流事業

波介川は、仁淀川の河口から2.0km付近に合流する右支川で、流域面積 73.3km²、流路延長19.0kmの一級河川で、土佐市を貫流し、仁淀川に合流する河川の中では下流部最大の河川です。洪水時には仁淀川本川の水位が波介川より高くなり、しかも波介川は上流に行くほど地盤が低い低奥型の地形であることと相まって水はけが悪く、土佐市中心部は過去幾多の水害を被ってきました。

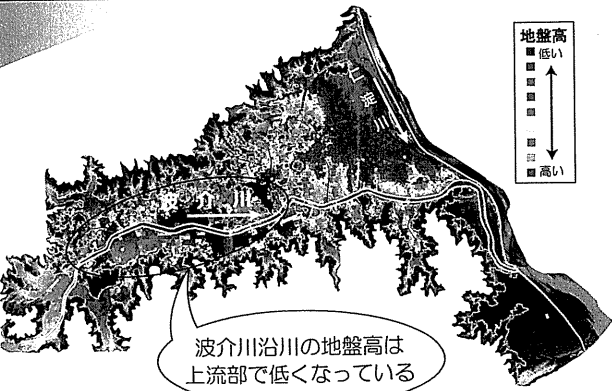


こうした波介川流域の特性を踏まえ、恒常化する浸水被害の軽減を目指して、昭和60年「波介川河口導流事業」に着手しました。「波介川河口導流事業」は、現在の合流点を河口部に付け替えるもので、波介川の洪水を仁淀川に排水しやすくなり、洪水による波介川流域の浸水被害を大幅に軽減させることができます。

波介川

波介川流域ではなぜ水害が起こりやすいか

波介川流域では、合流点から8km地点付近までは仁淀川の洪水によって運ばれた砂礫が河道沿いに堆積し、堤防状の小さな地形（自然堤防）となっており、周辺の地盤高が高くなっています。波介川は、この仁淀川の自然堤防の末端部を貫流して流下しています。しかし、これより上流部では、仁淀川の自然堤防の背後地で、地盤高は下流部に比較して低くなっています（これを「低奥型地形」と呼んでいます）。



波介川沿川の地盤高は上流部で低くなっている

このように「低奥型地形」であることから波介川流域の水はけが悪く、洪水時に仁淀川本川の水位が高くなると、水が排水しきれずに溜まり、浸水被害が生じます。特に昭和50年8月の5号台風では、浸水面積1,590ha、浸水家屋3,354戸にも及び大被害となりました。



昭和50年8月洪水による土佐市街地浸水状況

波介川流域の浸水被害状況

洪水発生年月日	浸水面積 (ha)	浸水家屋(戸)	
		床上	床下
昭和50年8月 (台風5号)	1,590	1,915	1,439
平成9年9月 (台風19号)	326	1	13
平成10年9月 (集中豪雨)	377	11	59
平成16年10月 (台風23号)	558	8	47
平成17年9月 (台風14号)	533	33	78



▲ H17洪水による国道56号冠水状況

平成17年洪水では、地域の重要交通網である国道56号、主要地方道「土佐伊野線」が冠水するとともに、土佐市の市街地を含む5地区では、約7,700人に對して避難勧告が発令されるなど市民生活に莫大な影響を及ぼしました。

S50年・H17年洪水による浸水被害状況

波介川流域の浸水区域
昭和50年8月 台風 5号
平成17年9月 台風14号

① 昭和50年の水位と現在に比べる
② 波介川の水位と現在に比べる

S50年洪水時 S50年洪水時 S50年洪水時

波介川河口導流事業【床上浸水対策特別緊急事業】

土佐市

波介川

現合流点

仁淀川

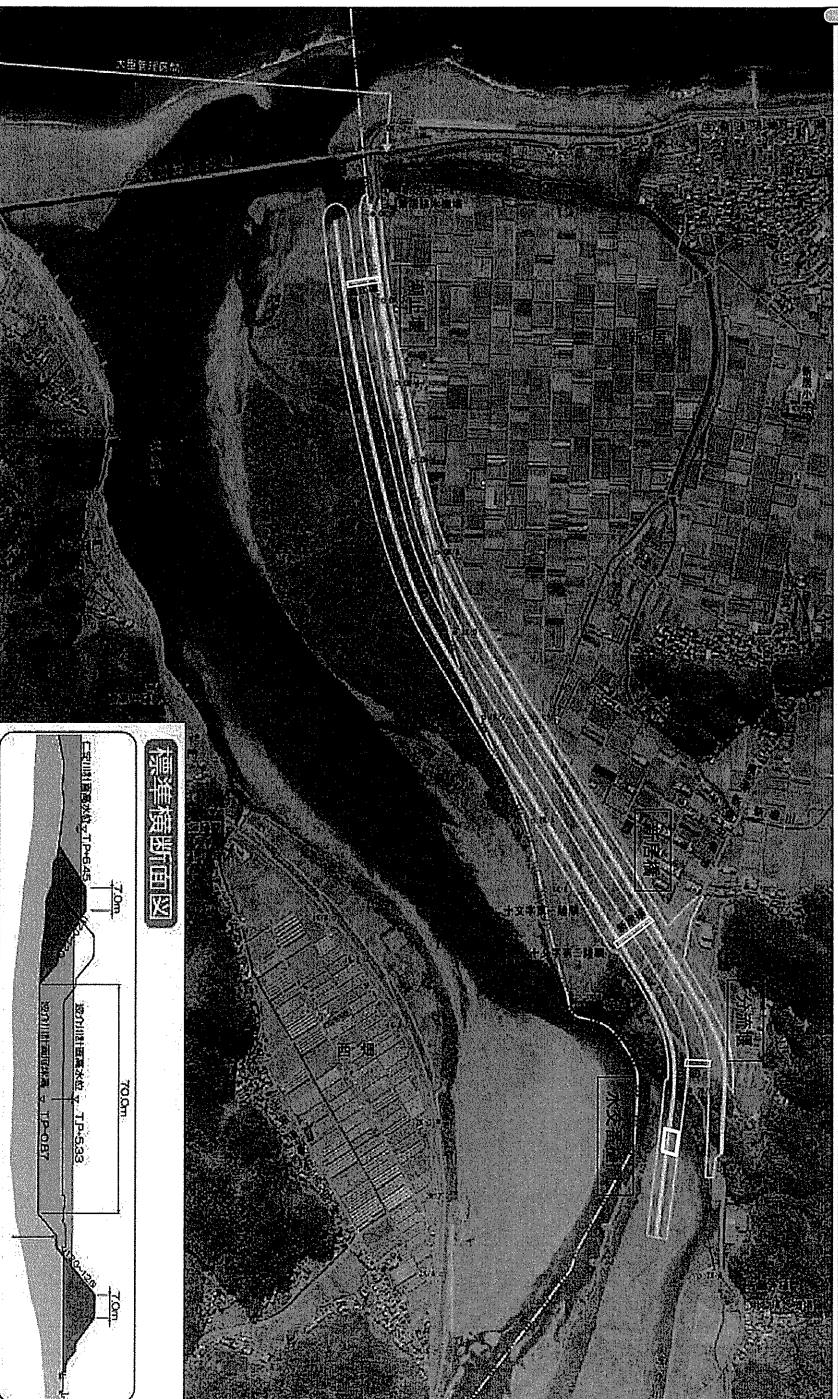
波介川河口導流事業
L≒2,500m

高知市

- 【計画概要】
- 事業延長：2,500m
 - 事業内容：波介川の仁淀川合流点を河口に導流
 - 築堤工……………5,100m
 - 掘削工……………1式
 - 潮止堰……………1式
 - 水交番樋門……………1式
 - 分流堰……………1式
 - 新居橋……………1式

— 計画法線

波介川河口導流事業 全体計画図



標準横断面図

